20240114　朝礼拝　イザヤ書54章10節

「寄せては返す波のように」

「喉元過ぎれば熱さを忘れる」という諺があります。私の人生の振り返ってみて、この諺に当てはまることが沢山あったなぁ、と思います。つらいこと、悲しいこと、悔しいこと、反省したこと。多々ありました。そのことが起こった時には、本当に心が張り裂けるとか、地面が抜けるとか、荒れ野に放り投げられるとか、そんな心境で、激しい感情を身体に刻み込むくらいの勢いで考えていたことを憶えています。でも、これも神様の恵みの一つの形なのでしょうか。時が経てば、張り裂けたような心は、元通りとはいかないけれどある程度形を取り戻し、底が抜けた地面に再び立てるようになり、放り投げられたと思われた荒れ野から気付けば、豊かな緑の野に戻ってきていた、ということが何度もありました。「喉元過ぎれば熱さを忘れる」。それは、後悔や反省が長続きしないことを責め立てたる諺かも知れませんが、でも、私の人生において、「喉元過ぎても」ずっと苛烈に、いつまでの激しく響き続ける反省や後悔があったなら、私は、私の人生を諦めたくなっていたかも知れません。

タレントの明石家さんまさんが、昔「踊るさんま御殿」という番組の中で、「いや、ホンマ、忘れるってことがないと、誰も生きていかれへんよ」と言っていて、「確かに、その通りかも」と思いました。忘れてはならない、過ち、罪、災い、事件、事故、争い。もちろん、あると思います。忘れないことで、同じ悲しみを繰り返さないよう私たちは備えています。その努力の積み重ねが、学習であり、進歩であり、自分の人生だけでなく社会を改善していく、重要な取り組みだと思います。

でも、そういう人のため、社会のため、誰かのため、という枠組みを取り払ったところにある、「自分の救いのため」という点では、「喉元過ぎれば熱さを忘れる」ことによる恵みは、確かにあ

るんじゃないかと思います。多分、私たちは、喜怒哀楽を満遍なく味わい、けれど、時間の経過と共に、喜怒哀楽をそこそこ忘れつつ生きて、再び、喜怒哀楽を与えられることを繰り返す中で、何度も何度も、祈ったり、感謝したり、悲しんだり、嘆いたりしながら過ごしていく。

人の世は、目の前の罪や過ちや悲劇に、敏感に燃え上がったり、激昂したりします。そして、その感情の高まりが、人の世を正す大きな波となり、社会変革の原動力になることもあります。けれど、私たちが、人類の歴史をすべて覚えてはいないように、私たちは、その大きな波も、社会変革の原動力も忘れていきます。かつてあった過ちも、罪も、災いも、事件も、事故も、争いも。私たちは、そこそこ忘れてしまって、古い書物や歴史書の中にだけ、その出来事があった事実を留めていきます。

山が移るくらいの大激動があったことも、丘が揺らぐほどの大変動があったことも、私たちは忘れていく。1 月 1 日の能登地震が起こった直後、NHK のアナウンサーが、「津波が来るから逃げて！」と何度も叫んだそうですが、東日本大震災を知らない世代、覚えていない世代は、その放送を見て「うるさい」とか「やりすぎ」とか、思った人もいたそうです。誰が悪いとか、何かが不足しているとか、そういうことではなくて、私たちが努力している知識の継承という営みには、自ずと限界があるということかと思います。激しい経験をした自分自身も、そこそこ忘れるのだから、世代を超えて、その経験を受け継いでいくのは、より難しいと言えるでしょう。

だから、災害を経験するたびに、大きな困難を経るたびに、私たちは、法律を変えたり、制度を整えたりして、個々人の経験に基づく改善ではなくて、社会や組織の仕組みを変えることを通して改善を続けています。能登地震の時に「津波が来る」と叫んだＮＨＫのアナウンサーも、別に自分が被災したわけではないでしょう。このアナウンサーに地震や津波の激烈な経験があったわけじゃないと思います。ただ、ＮＨＫという組織の決まり事として、津波の可能性がある時には、そう伝

えるようにと規定されていたから、「津波が来るから逃げて」と叫んだのだと思います。人は「喉元過ぎれば熱さを忘れる」ものなのです。だから、人は、組織や書物に、その忘れがちな記憶を保存していきます。

聖書を日々読んでいる私たちも同じだと思います。私たちは忘れてしまいます。良いことも悪いことも。まして、自分の生まれる前の恵みや懲らしめなどは、憶えているわけありません。だから、こうやって、聖書を読んで、人の歴史を知ると共に、神様の御業を再確認して、反省や後悔、賛美や感謝を受け継いでいるのだと思います。私たちは、忘れるから、でも、忘れてしまうことが嫌だから、この古い聖書と言う書物を開いて、歴史を掘り起こし、大切な教えを受け継いで、これから、もっと良い人生と歴史を紡いでいくために、神様の御言葉に耳を傾けているのです。

聖書を開く理由は、まだあります。かつて大きな災害があったこと、大きな悲劇があったことを知って、しかし、そこで神様の愛が終わらなかった事実を受け止めるために、私たちは聖書を読んでいるのかも知れません。「山が移り、丘が揺らぐこともあろう。しかし、わたしの慈しみはあなたから移らず、わたしの結ぶ平和の契約が揺らぐことはないと、あなたを憐れむ主は言われる」。これは、大きな災害か悲劇を経験した、大昔の信仰の大先輩の信仰告白です。未来を生きる私たちに向けて発せられた福音です。「あなたたちの生きる時代にも、つらいこと、悲しいこと、悔しいこと、反省すべきことが起こるだろう。けれど、神様の慈しみはあなたから移らず、神様の結ぶ平和の契約は揺らぐことはないから」と、「あなたを憐れむ主は、そう言われているんだよ」と。そんな福音のメッセージだと、私は受け止めています。

私たちは忘れることを赦された存在です。幸せに生きていくために「喉元過ぎれば熱さを忘れる」という手段を与えられた存在です。しかし、一方では、忘れてはならないこと、忘れない方が良いことについては、聖書を読むことで学ぶようにと導かれた存在でもあります。聖書とは、神様によ

って忘れることを赦された私たちが、でも、忘れちゃならいことを知るために与えられた知恵と福音の書なのだということです。私たちが、今までも、これからも、多くの試練や悲劇を味わうとしても「わたしの結ぶ平和の契約が揺らぐことはない」という神様の御言葉は、永遠に響いていきます。しかも、それは空しく響くのではなく、寄せては返す波のように、繰り返し繰り返し、私たちに与えられる喜びや安らぎと共に、私たちの心と身体を励ましてくれます。どんな悲劇が起こっても、日また昇ります。親切にしてくれる人が現れます。ともに苦労を分かち合い、笑い合える関係が生まれます。そんな身近な出来事から、「わたしの結ぶ平和の契約が揺らぐことはない」という御言葉は熱を帯び、真実味を増していくのだろうと思います。

この世界を生きる以上、常に順風満帆、幸福成就とはいきません。でも、その悲しみにある時も、その喜びにある時も、いつも隣に神様がいて、イエス様が寄り添ってくださることを、私たちは忘れないでいたいと思います。そして、その励ましと支えを忘れないために、いつも聖書に親しむことを続けていきたいと思います。数千年の含蓄のある聖書は、私たちに教えてくれています。「山が移り、丘が揺らぐこともあろう。しかし、わたしの慈しみはあなたから移らず、わたしの結ぶ平和の契約が揺らぐことはないと、あなたを憐れむ主は言われる」と。社会を揺るがす出来事がある時に、私たちは、それでも決して揺るがない方の御言葉に耳を傾けて歩んで参りたいと思います。それは、自分自身の心の平安のためであると同時に、常に希望を忘れずに世の中に関わっていくという「世の光」としての役割を担うことでもあります。神様の揺るがぬ約束を信じて、今日から始まる１週間も共に歩んで参りましょう。お祈りを致します。

神様。今日も私たちを、この礼拝堂に招いてくださり、感謝致します。あなたは、御心のままに、試みと困難とを与え、また、祝福と恵みで満たしてくださいます。人の歴史は、その積み重ねと繰り返しであったと言えます。しかし、その歴史にあって、あなたが決して平和の契約を忘れない方であると告白した信仰者がいました。山が移り、丘が揺らいでも、私たちへの憐れみを忘れない方がいると教えてくれた預言者がいました。私たちは、それぞれの人生を歩む中で、何度も何度も、この福音へと立ち戻ることを忘れないでいたいと思います。聖書を読み、賛美と祈りを続ける中で、どうか、私たちが、あなたの永久の愛と憐れみと、絶えることのない恵みと祝福とを忘れないでいられるように、どうか、あなたが私たちの信仰を強め、望みを新たにしてください。

このお祈りを、我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します